

性同一性障害当事者が語る高校生活

藤井 徹也¹⁾ 篠崎 恵美子²⁾ 大林 実菜²⁾
菊地 美帆³⁾ 中山 和弘⁴⁾ 工藤 美子⁵⁾

抄録

本研究は、性同一性障害 (gender identity disorder, 以下:GID) の高校生が, 周囲の生徒や親へのカミングアウトおよび高校生活で困ったことについて明確にするため, 5名のGID当事者に高校生活を想起してもらい, インタビュー調査を行った。その結果, 高校時代にカミングアウトした者は2名であり, カミングアウト後に一部生徒より, 否定的な態度を取られた経験があった。また, 親へのカミングアウトは4名が母親に行い, すべての事例においてカミングアウトされた母親は驚きを示した後に受容した。これらのことから, 高校生へ正しいGIDに関する知識を専門家と連携して教授すること, GID当事者の子どもを受容できない保護者には十分に寄り添うことが必要である。また, 高校生活で困った点は, 制服, 更衣, 修学旅行の入浴などがあった。これらは, 日々の生活に密着する内容であり, 高校全体における環境の整備が必要である。

キーワード (Key Word)

カミングアウト, 高校生, 経験, 親, 性同一性障害

I. はじめに

性同一性障害 (gender identity disorder, 以下:GID) を有する者は, 近年, 若年層において増加傾向にある (阿部, 2006, 矢野ら, 2007)。平成25年に文部科学省が全国の国立及び私立の小学生・中学生・高校生と特別支援学校の生徒約1300万人を対象として行った「学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査」では, 606件の事例が報告され, その66.5%

-
- 1) 豊橋創造大学保健医療学部看護学科
Toyohashi Sozo University School of Health Sciences Department of Nursing
 - 2) 人間環境大学看護学部看護学科
University of Human Environments School of Nursing
 - 3) 常葉大学健康科学部看護学科
Tokoha University, Faculty of Health Science, Department of Nursing
 - 4) 聖路加国際大学看護学部
St. Luke's International University College of Nursing
 - 5) 兵庫県立大学看護学部
University of Hyogo, School of Nursing

が高等学校からの報告であった(文部科学省, 2014)。また, 平成16年7月施行の特例法では, 戸籍の性別変更等も可能となり, GIDの児童・生徒が自認する性を家族や周囲が受け入れ, 対応することが求められている(山根ら, 2006)。しかし, 中塚ら(2004)は, 思春期は精神的に不安定な時期であるとともに, 二次性徴のために, 性別違和は強く, 身体の急速な変化に焦燥感を持ちやすい時期であることから, 自認する性の公表は, GID当事者とその児童・生徒を受け入れる側の双方にとって容易ではないことを言及している。加えて, 土居ら(2018)は, 青年期の心理的離乳過程における「不承認」という親子関係が自傷行為傾向を高め, 特に母親の子どもに対する関係の歪みが自傷に関与することを指摘している。実際にGID当事者が家族内でカミングアウトする相手は母親が多い傾向にあるが, 親がGIDを否定し, その結果GID当事者の自殺企図が生じる可能性を報告している(藤井ら, 2013)。GIDの治療は20歳代であっても, 親のサポートが必要であるとされている(杉浦, 2014)。さらに, 人生の途中から別の性別を選択して生きるにはカムアウトが必要である。しかしそのカムアウトを家族などに「否定」されると断絶や制圧など関係性が崩壊するとされる(古谷, 2014)。

高校生は, 青年中期にあたり, ボディイメージが激変しやすく, 心身ともに変動をきたす年代である。同時に, 心理・社会的側面では自分をひとりの独自の存在としてみるいわゆるアイデンティティの確立という大人社会に適応していく移行期である(二渡ら, 1990)。また, 思春期は, 些細な刺激に過剰に反応したり, 押さえきれない衝動におそわれるなど, 多感で繊細な時期にあるとされる(石田ら, 2018)。このような心理的, 社会的発達段階にあるGID当事者の多くが, 学校の制服が嫌, スカートをほきたくない, 学校で男/女として扱われるのが苦痛であると感じていることや, 家族から/学校で, 髪形や服装について注意された経験があると言われている(松永, 2016)。また, このような子どもをサポートする親自身も悩み, 葛藤する事例が報告されている(荘島, 2010)。

一方, 現時点ではGIDの児童・生徒の学校における受け入れや, その親に対する具体的な対応策は示されていない。このため, GIDの児童・生徒やその親への対応策を考えることが急務であると考え, 高校生は身体的な性が完成する時期であり, 性自認や性指向など自己や他者の性に対して敏感に反応する時期でもある。そのため, GIDの高校生が, 学業, 日常生活を支障なく過ごすための支援を検討することは重要であり, またGIDの高校生が周囲と良好な関係を構築・維持できる環境の整備が必要である。これらのことから, 本研究ではGIDの高校生が, 友人や教師, 親へのカミングアウト, 高校生活において困ったことを明確にすることで, GIDの高校生への支援の方策を検討するための基礎的資料を得る。

II. 研究方法

1. 研究対象

高校時代のことが語れるGID当事者(20～30歳前半)とした。対象の抽出は以下の順に行った。①GID当事者グループの代表者に連絡した。②高校時代のことが語れる当事者に代表から本研究の概要の説明および協力依頼をしてもらった。③研究協力の意向を示した者を紹介してもらった。④研究者から個別に連絡をとり, 研究の概要およびプライバシーの保護等につい

て説明し、同意を得ることができた者を対象とした。在学中のGIDの高校生に協力を得ることが望ましいと考えるが、直接的なインタビューによる影響を避けるため成人の当事者を調査対象とした。

2. 調査方法

半構成的面接法を用いた。面接時までには高校生活の体験などを十分に想起してもらった。面接時間は45分以内とした。インタビュー内容については、許可を得て録音した。調査は、2019年2～3月である。

3. 調査内容

調査内容は、以下の①～⑨の項目とした。①対象者の基本情報、②GIDについて、高校や生徒へのカミングアウトの有無、③カミングアウトの有無の理由、④カミングアウトについての生徒、教員の反応、⑤高校生活において困ったこと、⑥高校や教員に望むこと、⑦GIDについて、親へのカミングアウトの有無、⑧カミングアウトの有無の理由、⑨カミングアウトについての親の反応。

4. 分析方法

逐語録から上記調査項目の視点に沿って、それらに関する語りについて文脈を損なわないように抽出し、その内容を解釈・要約した。

5. 倫理的配慮

プライバシーが保たれる個室で研究者が直接書面を用いて説明を行い、同意書を交わした上でインタビューを行った。想起する過程で嫌な思い出が出現する可能性やインタビュー中に中断しても構わないこと、いつでも辞退できることを伝えた。得られたデータから逐語録を作成する際、個人が特定されないように記号を付した。本研究は研究代表者が所属する大学の研究倫理審査委員会の承認（H2018017）を受けて実施した。

III. 結果

結果内の「 」は対象者の語りから抽出された内容を示す。また、()内A～Eは対象者を示す。

1. 対象者の基本情報

対象者はGID当事者5名であり、全員Female to Male（以下、FTM）であった。自分の性に違和を感じ始めたのは、小学生または中学生であり、そのきっかけは、恋愛対象が同性の女性であったことや、女子用の制服を着ることへの抵抗感によるものであった。

2. 周囲の生徒、教員へのカミングアウト

2名が高校1年生でカミングアウトしていた。カミングアウトに繋がったきっかけは、「ま

わりが気づいているから素直に生きなよっていわれて、高校1年生の3学期にカミングアウトした(C)」といったように友人の勧めや当事者を理解していた友人の存在であった。1名については、「怖かったですね。中学から仲良い子は知っていたが、高校1年生で新しい友達ができる。新しい友達がどう感じるかという恐怖心があった。GIDのことを知って、自分から離れていくなればそれまでなのかなって自分の中で割り切るしかなくて(E)」とカミングアウトに対する割りきりと同時に恐怖も感じていた。

一方、カミングアウトしなかった3名の理由としては、「自分のことを知ってしまったら、嫌われてしまう(A)」、「集団に属さないといけない。女性として生きるしか仕方ないとカミングアウトできなかった。波風立てて過ごすことができなかった(B)」、「集団行動する感じで、輪からはずれるというか、怖くて言えなかった(D)」と他者から理解されないことや周囲への配慮が理由として挙げられた。同時に「誰にも言えない孤独感みたいなのはあった(A)」、「相談する友達はいないし仕方ないかなと思っていた(B)」など孤独や諦めを感じていた。

3. カミングアウトを受けた生徒、教員の反応

カミングアウトに対する周囲の生徒の反応は、「同じクラスの子は問題なく理解してくれた(C)」、「(同級生の中で)自分から離れていく友達はいなかったのよ良かったと思う(E)」と2名に関しては、同級生には受け止めてもらえたが、1名は「男の子からの視線がいやだった(C)」と男子からの視線を不快に感じ、1名は「病気だと言われた。きつい性格の先輩も多かった。(E)」と先輩からの誹謗を経験していた。また、2名とも周囲全体にカミングアウトしたため、アウティングの影響は受けていなかった。

教員の反応については、「自分は本当の男にはなれないと悩んで保健室へ行ったことがあった。その時、保健の先生が、私は当事者じゃないからわからないが、GIDに関する本を出してくれて、悩みがあったらいつでも相談するようにと言って助けられた(C)」、「高校の先生は皆知っていた。そしてその都度どのようにしたいかの希望を聞いてくれた。とても恵まれていたと思う(E)」と述べており、自分の悩みに対して養護教諭、担任教員が適切に対応してくれたことが窺え、対象者の話や意見を聞く対応が、サポートになっていた。

4. 高校生活で困ったこと

高校生活で困ったことについて、データを分析した結果、制服、同性生徒との更衣、修学旅行での入浴、トイレに関する内容が抽出された。

全ての対象者が、「スカートが本当にいやで、親に言いたかったけど言えず、スカートで頑張ってた(B)」などと高校の女子用の制服のスカートの着用で抵抗感を持っていた。2名は「女子用のズボンで学校に通った。夏だとセーラー服。夏だけいやいやで(C)」、「1年の後期にスラックスが可能となり、そこからずっと通っていた(E)」とズボンを着用することで対応をしていた。

同性生徒との更衣については、「一緒になるのがいやだったので、1番に更衣をするか、逆に最後にするかでやりすごしていた(B)」、「ちょうどみんなから隠れられるスペースで着替えていた(E)」などとカミングアウトの有無に関係なく抵抗を感じていた。また、「自分がブラジャーをしていること自体がすごくいやで、それを見られるのも嫌だった(A)」、「更衣の時、

目のやりどころに困る。自分も見られるのがいやだし、見るのも困るし、特有の匂いもあってそれもつらかった (D)」と自分の下着姿を見られることへの抵抗感についても訴えていた。

修学旅行での入浴については、「修学旅行はいやだった。特にお風呂 (D)」などと他の女子生徒と入浴することに4名が抵抗感を示していた。そのうち、カミングアウトしていない2名は、「お風呂とかがどうしようって感じではあって、裸にならないといけないし、でもその当時は女子として過ごすしかないという頭しかなかったので、どうしようとかもなく、ただそこで女子としているみたいなき感じだった (A)」と仕方なく入浴をしていた。一方2名は個別に入浴をしていた。カミングアウトしていない者は、「修学旅行のときは大浴場じゃなくて、部屋のお風呂にこっそりと入った。生理だと言って、一緒に入りたくなかったので (B)」と月経との理由を述べて個人的対応をしており、カミングアウトした対象者は、「みんなは大浴場だったが、先生が個室のシャワーを貸してくれた (E)」と教員の対応によって個別に入浴できていた。

トイレについては、「トイレは入るのはいやけどまだ自分だけの空間 (D)」、「トイレに困った。女子の個室を使うしかなかった。多目的が欲しかった (E)」と他の女子との同じ行動に2名が違和感をもっていた。

5. 高校および教員に対する希望

高校側 (先生など) に望むことは、「特別扱いされたくない (A)」、「個人の問題なので、個人としてむきあってほしいと思う。男子ならエグザイル系になりたいわけじゃないし、変にLGBTはこうっていう、概念は持ってほしいけどそれだけで判断してほしくない (B)」、「女は女らしくみたいなのは本当にいやだった (C)」、「女性らしさは求められたくない。喋り方だったり、女の子だから足を閉じなさいと言われてたり (D)」と、性別で決まった行動や特別な扱いをされたくないと考えていた。

6. 親へのカミングアウト

親へのカミングアウトは、1名が高校時代、1名が高校卒業時であった。カミングアウト方法は、直接 (C・E) カミングアウトしていた。事例 E については、「(スクールカウンセラー) じゃあ学校に親御さんにきてもらって3人で話しましょうとなり、カミングアウトした (E)」というように、高校のスクールカウンセラーと母親と3名の席でカミングアウトしていた。高校時代に周囲にカミングアウトした対象者は、「高校2年入ったくらいです。父には大学の時に言いました (E)」「高校卒業と同時にカミングアウトしました。公表、というか彼女ができたので、家に連れて行って彼女ですと紹介はしていた (C)」と、同時期に親にも伝えていた。カミングアウトされた親の反応は、「最初は泣いていた (C)」であったが、カミングアウトの間に「自分の好きなように生きて、それで幸せならいいからっていう風に言っていた。男として生きるならしっかり女の子を支えていかないといけないって使命があるから、そこはちゃんと男らしくしっかりしなさいと言われてた (C)」と受容された。1名の母親は、「精神科のカウンセリング。別々の部屋で。親がそこで何を言われたかわからないが、だんだん親と性別について話す回数がふえて、だんだん親も好きにしなさいって感じだった。自分の人生だからって、それを言われるまでに結構時間がかかった。3年とか (E)」とカウンセリングを当事者と受け

ながら、数年かけて理解を示した。

高校時代にカミングアウトしなかった事例では、2名は、「大学3年でカミングアウト。就職活動でこれからも女性としていきたくない (A)」、「自分の将来の結婚の話がでて、なんでも独身なのかとなったときに男子として生きたいと、ぼそつとやってしまった (B)」と、就職してからの生き方や結婚について考えることで、親へカミングアウトすることになった。「自分は性の部分は受け止められなかったところはたしかにあったが、いま言うことって親が苦しむ。親自身も自分を責めてしまう (D)」と述べており、カミングアウトすることで親が苦しむことになると考えてカミングアウトしていなかった。

IV. 考察

本研究では、GID 当事者の高校時代の経験についてインタビューした結果をふまえ、GID の高校生に対する支援の方策について、学業、日常生活を支障なく過ごすための支援、および周囲と良好な関係を構築・維持できる環境整備の2つの観点から述べる。

1. 学業、日常生活を支障なく過ごすための支援

高校生活では、男女別の制服、更衣方法、トイレ、修学旅行での入浴方法に対して、困った経験を訴えていた。今回の対象者は、高校卒業後数年たっているため、現状とは異なる点も推測されるが、GID の生徒にとっては、改善すべき項目と考える。全国の高校を対象にした2014年の報告(文部科学省, 2014)では、制服については全体で28.8%(戸籍上男8.2%, 戸籍上女37.3%), 更衣室は全体で37.2%(戸籍上男35.6%, 戸籍上女37.9%), トイレは全体で45.2%(戸籍上男46.6%, 戸籍上女44.6%), 宿泊研修(修学旅行含む)は全体で23.2%(戸籍上男21.9%, 戸籍上女23.7%)が困っていた。その後、2015年4月に、『性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について(通達)』が出され、服装、更衣室、トイレ、修学旅行の入浴についての支援例が紹介された(文部科学省, 2015)。トイレについての取組みは、『みんなのトイレ』の配置や身障者用トイレに虹色ステッカーを貼り『思いやりトイレ』とした紹介がされている(日本経済新聞, 2018)。このような工夫により、トイレについての改善は可能と考える。更衣室については、実際の対応策としては『隠れられる場所での着替え』であったため、必要な部屋の確保が必要であり、保健室の活用も考えられる。修学旅行の入浴に限定された対応策のデータではないが、今回の結果で挙げた項目の中では、前述した調査において全体で23.2%と対応が最も少なかった。実際の対応策としては、『月経という理由で個別に入浴する』『教員から個室のシャワーを借りた』であった。文部科学省の支援策においては、『1人部屋の使用を認める』『入浴時間をずらす』が挙がっており、可能な限りは、個別に入浴できる工夫を考えることで対応できると考える。制服については、2014年の対応において戸籍上女が37.3%と戸籍上男に比べ約30%多かった。このことは、女子に対するスラックスの支援の方が行いやすいためと考える。また、今回の結果からも抵抗は『スカート』の着用であり、『スラックスで対応』または希望していた。FTMの場合は、スラックスの導入で解決は可能と考える。一方、Man to Female (MTF) については、対象がいなかったため考察はできない。

2. 周囲と良好な関係を構築・維持できる環境整備のための方策

1) 高校教員への GID に関する適切な情報の教授

今回の結果では、GID 当事者は『高校および教員に対し性別で決まった行動をとるような指導や特別な扱いをして欲しくない』ことを希望していた。日高 (2015) は、性同一性障害の生徒に関わったことがある教員は、11.9%であったと報告している。このことから、多くの教員は、GID 生徒の存在に気が付かず、戸籍上の性別で対応している可能性がある。しかし、国民の 5% は LGBT であることが報告されている (日高, 2015)。今回の事例のようにカミングアウトできない生徒もいることや、カミングアウトをしない選択をする場合もあることを認識して対応することが必要であると考ええる。

また、『LGBT はこんなんだと決めつけて欲しくない』との訴えもあった。日高 (2015) は、26.1% の教員は同性愛や性同一性障害について知らないと報告している。渡邊 (2019) は、高校教員の 64.4% が LGBT に誤解や偏見を持っていた・どちらとも言えないと回答したと報告している。このことから、教員が GID および LGBT に対して正しい知識を持たないことで、適切な対応ができていない可能性がある。渡邊 (2019) は、LGBT 研修後には 75.9% が誤解や偏見を修正できたと述べている。したがって、高校教員への GID および LGBT に関する研修会を実施することで、適切な対応に繋がると考える。

2) カミングアウトに関する意思決定支援と GID に関する周囲の理解促進

今回の結果からは、2 名がカミングアウトしていた。友人との関係性の中でカミングアウトする割りきりができていたが、1 名は同時に仲間が離れて行くことについての恐怖を感じていた。同時に 2 名とも異性や先輩の生徒からの気になる視線や発言を気にしていた。一方で、カミングアウトをしなかった 3 名は、その理由について『嫌われる』『仲間外れになる』と述べており、周囲の生徒の受け入れへの不安を感じていたことが明らかとなった。

思春期の多感な時期にカミングアウトすることは、周囲との関係性が大きく変化する可能性もあり、当事者にとっては容易ではないことが推測できる。加えて、その後の人生を大きく左右することにも繋がり、当事者の意思を尊重した関わりが重要であると考えられる。しかし、カミングアウトしないことによって、前述したような生活上の困難が生じることも考慮し、何が最良の選択であるのかを共に考え、慎重な対応ができるよう支援していくことが必要である。そのためには、GID に関する相談窓口や相談機会を設けることが必要である。

一方で、今回の結果が示すように、否定的な反応を示す生徒の存在や周囲の反応の不安から、カミングアウトしたいと選択しても、できない現状があることが窺える。加えて、カミングアウトするためには、肯定してくれると確信できる友人の存在が必要不可欠であるが、現状では、すべての人が GID 当事者からのカミングアウトによって肯定的な反応を示すとは限らない。そのため、カミングアウトを受ける側に対し、GID や LGBTQ (Lesbian/Gay/Bisexual/Transgender/Questioning) についての正しい知識を教授する必要がある。橋本 (2015) は、近年の人間の性と性教育に関する国際的動向は性的少数者も含む多様な人々の性のありようを認め、すべての人々が性的健康や幸福を追求する権利、セクシャル・ライツへと発展してきており、それらを啓発するためには性教育が必要であると述べている。加えて、日本の高校での教

育では性的少数者について語っていないことも指摘していることから、適切な教育がなされることが望まれる。これらの適切な教育は、カミングアウトに対する受け入れをスムーズにすることにとどまらず、多くの生徒が人間の多様な価値観を学ぶ機会になり、当事者にとって生活しやすい環境に繋がることも期待される。

また、教授を担う教員からは、性教育に抱いている課題として『教員自身が教育を受けていない分野であることに対する限界感』を挙げている（斎藤ら，2015）。さらに養護教諭からの性教育については、カリキュラムに位置づいていないことに加え、職務が忙しく、学内外との連携が十分でないことから、教授が困難な状況が報告されている（青柳ら，2016）。富山（2015）は、性教育の継続的な教育は保健体育の授業のみに依存している傾向があるとしている。そのため、性教育の効果的な対応策としては、外部講師（医師、助産師など）の協力を活用することが有効であるとされる（斎藤ら，2015，富山，2015）。茂木ら（2010）は、ジェンダーの平等意識については、女子は男子より意識が高く、職業科男子生徒・女子生徒は性別役割分業意識が強いと述べている。高校におけるGIDやLGBTQの教育についても専門家との協力による教育が現実になれば、GIDの生徒のカミングアウトや周囲の生徒の受け入れに関する問題点も解消することが可能となると考える。その際には、受講する生徒の学科・コースなどの特徴を踏まえた内容を事前に十分に打ち合わせする必要がある。さらに、今回の事例Cのように養護教諭として十分に対応できない際には、高校生に理解できる書籍やリーフレットなどの情報提供も必要と考えられる。中濱（2019）は、LGBT書籍については、借用履歴が残るとの報告から、保健室で貸し出すことで肯定的なイメージを発信する意義は大きいとしている。実現のためには、学内の相談窓口を生徒に周知しておくことも大切と考える。

3) 親へのサポート

思春期は親への依存的な関係が解消され、心理的離乳を迎える時期である。一方で依存心や甘えもありアンビバレントな感情をもち、この時期における親の理解不足や権威の押しつけは関係を悪化させるばかりでなく、子どもに心理的社会的な影響を及ぼす（土居ら，2018）。特にGIDの高校生の場合、親のサポートは20歳代であっても必要であると報告されており（杉浦，2014）、親子の関係を良好に保つための支援が重要であると考えられる。しかし、わが子からGIDであることをカミングアウトされたことを受容することは容易ではなく、親への適切なサポートが必要である。今回の結果では、親へのカミングアウトは、すべて母親が対象であった。1名は自らカミングアウト行い、1名が高校のカウンセラーと共にカミングアウトをしていた。また、カミングアウトされた母親は、2名ともに驚いた様子であった。1名の母親は、会話中にカミングアウトの内容を受け入れ、1名の母親は数年間カウンセリングを受ける中で受容をしていた。このことから、親の受容にも差があることわかる。田中ら（2018）は、40代～70代の中高年では、LGBTについて受容できると回答した者は4割以下であり、子供からのカミングアウトに対しても『受け入れがたい』、『最初は受け入れがたい』、『否定する』などの否定的な意見も少なくないと報告している。また、文部科学省（2015）は、保護者が当事者を受容できない場合は、保護者と十分に話し合い、可能な支援を行うように記載されている。今回の結果では、スクールカウンセラーの活用があり、時間は要したが受け入れに繋がった。このように、親に対しても向き合っ

築につながると考える。

V. 研究の限界

今回は、GIDの高校生自身のカミングアウトや高校生活で感じている内容を得ることができたが、現役の高校生でないこと、全ての対象がFTMであり、対象人数も少ないため、今後は現役のGIDの高校生に結果から得た内容を演繹的に確認する必要があると考える。

VI. 結論

高校時代にGIDの生徒は、女子用の制服を着用すること、同性との更衣、トイレの使用、修学旅行での入浴を困ったこととして挙げていた。また、周囲へのカミングアウトでは、受け入れられないことへの不安やカミングアウト後に望まない対応を経験していた。また、親へのカミングアウトでは受け入れまでの期間に差がみられた。教員に対しては、性別により行動などを決めつけられることへ改善を求めている一方で、理解を示して対応してくれた行動については肯定的に捉えていた。

VII. 謝辞

本研究にご協力いただいた当事者の皆様に心から厚く御礼申し上げます。

本研究において利益相反事項に該当するものはない。なお、本研究はJSPS科研費（課題番号：15K12795）の助成を受けて実施した。

<引用文献>

- 阿部輝夫（2006）：性同一性障害について。順天堂医学，52（1），55-61。
- 青柳千春，黒岩初美，丸山幸恵他（2016）：高等学校養護教諭が感じている性教育に関する困難感と今後の課題。群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活学科編，51，67-76。
- 土居正人，三宅俊治（2018）：親子関係が自傷行為傾向に与える影響。心身医学，58（5），423-431。
- 藤井徹也，玉腰浩司，中山和弘他（2013）：基礎看護技術演習での性同一性障害学生受け入れに関する調査。医学と生物学，157（6），1271-1277。
- 古谷ミチヨ（2014）：我が国における「性同一性障害当事者の性同一性」の概念分析。ヒューマンケア研究学会誌，6（1），55-64。
- 二渡玉江，新井治子，伊藤善一（1990）：ボディイメージの変容を伴う患者の看護に関する基礎的研究—高校生のボディイメージと性格特性—。群馬大学医療技術短期大学部紀要，11，67-73。
- 橋本紀子（2015）：ジェンダー・セクシュアリティと教育—海外の性教育関連教科書から日本の性教育を見直す—。女子栄養大学紀要，46，27-39。
- 日高庸春（2015），子どもの“人生を変える”先生の言葉があります。
<https://www.health-issue.jp/kyouintyousa201511.pdf>，（参照 2020.11.26）。
- 石田実知子，小池康弘，井村亘他（2018）：思春期への汎用性を備えた短縮版気分尺度の開発—項目反応理論に基づく検討—。学校保健研究，60（5），268-276。

- 松永千秋 (2016) : 青年および成人の性別違和. 臨床精神医学, 45, 373-376.
- 茂木輝順, 橋本紀子, 杉田真衣他 (2010) : 高校生のジェンダー平等意識と将来観に関する調査研究～共学進学校・別学進学校・職業科高校の比較を通して～. 女子栄養大学紀要, 41, 77-87.
- 文部科学省 (2014) : 学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査について.
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1322368_01.pdf, (参照 2020.11.26).
- 文部科学省 (2015) : 性同一性障害や性的志向・性自認に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施について (教職員向け), https://www.mext.go.jp/content/20201023_mxt_sigakugy_1420538_00002_007.pdf, (参照 2020.11.26).
- 中濱琴美 (2019) : 性別に違和感がある思春期の子どもへの養護教諭の支援のあり方. GID (性同一性障害) 学会雑誌, 12 (1), 111-119.
- 中塚幹也, 江見弥生 (2004) : 思春期の性同一性障害事例の社会的, 精神的, 身体的問題点と医学的介入の可能性についての検討. 母性衛生, 45 (2), 278-284.
- 日本経済新聞 (2018) : LGBT に優しい学校にトイレを改修, 制服に直し… . <https://www.nikkei.com/article/DGXMZO28346760Q8A320C1KNTP00/>, 2018/2/2015 : 50, (参照 2020.11.27)
- 斎藤佳余子, 二川香里, 松井弘美他 (2015) : 高等学校教諭の性教育に抱いている課題と期待——外部支援者との連携の視点から——. 母性衛生, 55 (4), 635-642.
- 荘島幸子 (2010) : 性別の変更を望むわが子からのカミングアウトを受けた母親による経験の語り直し. 発達心理学研究, 21 (1), 83-91.
- 杉浦郁子 (2014) : 「性同一性障害」概念は親子関係にどんな経験をもたらすか——性別違和感をめぐる経験の多様化と概念の変容に注目して. 家族社会学研究, 25 (2), 148-160.
- 田中敏明, 貞末俊裕, 武谷美咲 (2018) : LGBT の知識と理解に関する世代間格差. 九州女子大学紀要, 52 (2), 115-127.
- 富山美佳子 (2015) : 高校生を対象とする性教育と今後の取り組みに関する文献検討. 看護学研究紀要, 3 (1), 1-9.
- 山根望, 名島潤慈 (2006) : 性同一性障害 (GID) に関する心理的研究の近年の動向. 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 21, 231-247.
- 矢野里佳, 浦島創, 縄田秀幸他 (2007) : 福岡大学病院における性同一性障害治療の現状と症例の特徴について. 福岡大学医学紀要, 34 (3), 233-239.
- 渡邊歩 (2019) : LGBT に関する教員研修を通じた高校教師の意識の変化. 早稲田大学大学院教育研究科紀要, 26 (2), 13-23.